

[生活]

思いやりの心を育むためのアルパカ飼育の有効性についての研究

荒井 一人*

1 はじめに

小学校生活を新しくスタートさせる1年生にとっては、学校生活の全てが新発見であり、新しい自分との出会いである。子どもたちが経験する中には、他者との衝突やトラブルも含まれるが、よりよい形でそれらを乗り越え成長してほしいと思うのは、多くの教師が思うところであるだろう。しかしながら、筆者が1年生を担任した際には、級友の気持ちを押し量るようにすることや他者への思いやりを育む指導はなかなか難しいと感じた経験が何回もあった。これは、子どもに問題があるのではなく、これから培われるであろう他者理解の経験が圧倒的に不足していることが原因なのでは、間違いないだろう。では、いったいどのように指導したらよいのか。こうした、多くの1年生担任が直面するであろう疑問に対する一つの方策として、吉越(2012)は、動物に親しみ飼育する経験が、自分以外の相手を思いやる心を育み、豊かな人間形成の基盤を構築すると主張する。さらに、日本初等理科教育研究会(2000)は、ものを言えない動物の立場に立って飼育することが、感性の豊かさや思いやりの深さを醸成すると言明している。

これらの主張にあるように、動物飼育は対象となる動物が何を求めているか、何を欲しているのかを考え、級友と協力しながら活動していくことはできる。一方で、対象となる動物の大小や飼育の難易度によって、子どもの心が動物そのものから離れてしまうことも容易に推測できる。つまり、恐怖心を感じるほど大きな動物でも、協力して世話をできたという実感を持ってない小動物でも教育的な効果は薄れてしまうということである。また、単に動物飼育を行うだけで、子どもに思いやりの心が育つとは考えにくい。そこには、どのように飼育活動に向き合わせるか、どのようなかわりの場を設定するかという指導の在り方としての問題があり、この部分には、まだまだ研究の余地が残されている。

こうした問題意識を背景として、本研究は吉越の主張を支持する立場に立ちながら、その上で、いかにすれば動物飼育を通して子どもに「思いやりの心」を育むことができるのか、実践を通してその指導の在り方に示唆を得る目的で本稿を構成した。

2 飼育動物の特性

飼育対象の動物が何であるかによって、子どもに培われる感性にも変化は出てくる。今回の実践では、「アルパカ」を下述する理由により対象とすることにした。

アルパカは、大型動物でありながら、穏やかな性格で、子どもたちも安心してかかわることができる動物である。寒さに強く、例年積雪が見込まれる地域であっても、通年を通しての飼育が可能である。また、何よりも、不安な時には耳を立てたり、恐怖心をもって吐いたり、他の大型動物と比較し非常に感情がわかりやすい点の特筆すべき点であり、自分以外の「他」の感情を推察すること、自分の行為がどのように「他」に伝わっているかすぐにフィードバックされることが期待できる。さらに、1年生の児童と目線の高さがほぼ一緒であり、子どもがより「近い」対象ととらえられる可能性を秘めている。

3 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究では、以下を目的とする。

- アルパカを学習材として動物飼育を行い、子どもたちがどのように「他」の感情を推測し、思いやりをもって行動するようになっていくかを検証する。

* 長岡市立脇野町小学校

○アルパカを飼育する中で、「思いやりの心」を育むために有効となる教師の働きかけを分析し、授業改善への示唆を得る。

4 研究の方法

本研究は、N県内公立小学校において、1年生、男子14名女子11名、(計25名)に対して、平成27年度に実践した生活科「アルパカとなかよし」の活動実践を分析する。アルパカ飼育によって、子どもたちの中に「思いやりの心」が育まれたと捉えられる場面において、そのような姿を引き起こした要因は何であったか、その時の教師のかかわり方はどのようなであったかについて、発話記録や子どもの活動の様子、作文シートの記述をもとに分析し、考察することとする。

また、特に変容を望みたい2人の児童を抽出し、本活動によってどのような変容が見られたかを明らかにする。

A児(1年生男子)は、素直で人懐っこい性格であるが、級友の気持ちを考えて行動することを苦手としており、級友と衝突することが多い。B児(1年生女子)は、穏やかで明るい性格であるが、一部の級友に対してのかかわり方が指示的になることがある。どちらの子どもも、思いやりの心を育むことにより、級友とよりよい人間関係を築くことを期待する児童である。

5 実践

(1) アルパカと出会う

教師から与えられた動物で、教師から世話をすることを義務付けられた活動であると、子どもたちの飼育活動への意欲は、大きく損なわれてしまうかもしれない。そこで、まず子どもたちが実際にアルパカと出会い、触れ合うこととし、子どもから自然発生的に飼育をしたいとの欲求が出てくることを期待した。

子どもたちが初めてアルパカに出会ったのは6月である。バスで山古志アルパカ牧場に訪問した。最初は怖がって近づけない子どもや、えさを容器に入れたままでしかあげることができない子どももいた。しかし、子どもたちが想像していたよりもはるかにアルパカは大人しく、手で直接えさをあげたりなでたりするようになるのに、さほど時間はかからなかった。頬をアルパカの背中につけ、「気持ちいい。」と声をあげる行為には、ほんの短い時間で対象との距離をぐっと縮めることができた様相が伺える。約1時間、アルパカと思いのままに触れ合えたことで、帰りのバスの中では、「かわいかったな。」「また会いたいな。」などとつぶやく子どもが出た。また、学校に帰ってからも、「背中がふわふわで気持ちよかったよ。」「えさを食べてくれてうれしかったよ。」とアルパカと触れ合ったことを振り返り、全員でアルパカへの思いを共有し合ったことで、アルパカを飼いたいという思いが一気に高まり、校長にアルパカを飼わせて欲しいとお願いに行った。しかし、そこで待っていたのは、子どもたちが予想していなかった答えだった。校長からは、命を預かることについてもう一度真剣に考えるように言われた。簡単に許可が下りると思っていた子どもたちにとっては、真剣に命を預かる責任を考え始める機会となった。下記場面1はその後の授業における発話記録である。(なお、Tは教師、Cは子ども、A児、B児は抽出児童である。)

<p>T：お世話はどうすればいいかな。 C1：毎日やらなきゃだめだとおもう。 C2：毎日しなきゃ病気になるちゃうよ。 T：どんなお世話がひつようかな？ C3：えさやりと水やり。 C4：さんぽも必要だとおもう。 T：休みの日はどうする？ C5：休みの日は家でゆっくりしてたいな。 A児：えさを食べなきゃ死んじゃうよ。 C6：来れる人がお世話をすればいいんじゃない。 私、家が近いし来れると思う。</p>
--

【場面1】

「アルパカを飼いたい」という、子どもらしい素直な大勢の心の動きに反し、A児の振り返りシートには、「お世話がちゃんとできるか心配です。」と記述されていた。「えさを食べなきゃ死んじゃうよ。」の発言にも象徴されるように、飼育を現実にとらえ、それへの不安を感じているのが如実に現れている。

この後、飼育についてわからないことは昨年度飼育経験がある2年生に聞き、校長にもう一度お願いをして、飼育許可をもらうことができた。多くの子どもたちが大喜びしていたが、A児の表情は固いままであった。その日の作文シートには、「アルパカのお世話が心配です。」と再び記述されていた。まだ飼育への不安を完全に払拭できないでいることがわかる。

(2) アルパカとかかわる

アルパカがいよいよ学校へやってきた。ここで筆者は、子どもたちがアルパカと自由にかかわる時間(なかよしタイム)を重視して活動を進めた。教師から「さわってみよう」「なでてみよう」などと指示は一切せず、子どもの思いを大切にし、見守るスタンスで子どもたちの様子を把握するようにした。さわろう、なでようと近づいていく子ども、怖くて近づけないけどアルパカ親子の様子をじっと見ている子ども、クローバーをつんで冠を作る子どもと一人一人の行

動は様々だったが、それぞれの子どもと対象との距離感を尊重して活動を進めた。

① 9月15日

アルパカが入学してから4日目、この日のなかよしタイムでは、写真1のように、多くの子どもたちがアルパカを囲んでいた。触ったり、えさをあげたりしたくて、小屋の中のアルパカに寄って行く。アルパカはまだ子どもたちになれていないのか、壁の隅に寄り、その周りを子どもたちが囲むという状況であった。

A児はアルパカの近くにはいるが、触ったり、えさをあげたりすることはせず、級友が触ったり、えさをあげたりしている姿をじっと見ていた。その日の作文シートには、「あまりなかよくできなかった。つぎはなかよくしたい。つぎはなでたりしたい。」と記述していた。触ったり、えさをあげたりしたかったけどできなかったことが、アルパカとの距離をまだ遠いものとしている。

一方、B児は、体を触ろうとアルパカへ近寄り、子どものアルパカを優しくなで、「気持ちいい」と声を発した。その日の作文シートには、「毛はふわふわだった。あかちゃんかわいいよ。」と記述する。対象を受け入れる心の様相が、「かわいい」との子どもらしい表現で表れていることが分かる。2人の児童の違いに、アルパカとの出会いには、様々な思いや差異があることを確認できる。

② 10月8日

アルパカが入学してから約1カ月後のなかよしタイム、入学当初のアルパカへのかかわり方と比べると、少しずつ変化が見られるようになる。級友がえさをやったり、なでたりしているときのアルパカの様子を見て、「嫌がっているよ」「すこし離れよう」などと声をかけ合い始めるようになってきた。入学当初は、「触りたい」、「えさをあげたい」という思いが強く、自分の思いのままに行動していた子どもたちだったが、アルパカの様子を見て行動するようになっていった。

A児は、1カ月余り経つというのに、まだ触ったり、えさをあげたりすることができずにいた。作文シートには、「今日もなかよくなれなかった。」という記述が続いていた。今までは、怖さから触ったりなでたりすることができず、級友がそれをしているのを見ているだけであり、直接的な触れ合い方には変わりはない。しかし、この日は、小さな変化が起こる。写真2のように、初めてうんちの片付けを行ったことにより、直接触れ合えてはいないが、アルパカのために自分ができることを行為に移した。その行為は、「今日は少しだけなかよくなった。」という記述となって表れた。

一方、B児はアルパカの『動作』を観察するようになる。耳の動きに着目し、耳が立っている時は「嫌に思っている時」と、耳の動きからアルパカの感情を推測するようになった。また、無理やりえさをやると蹴ることに気付き、級友に対して、そうした行為はやめて欲しいという思いを抱き始めた。こうした『仕草』や『動作』への気付きは、他の級友がなかなか感じ取れていないことでもあった。対象からフィードバックされる情報への感受が高まりつつあることが感じられる。

③ 10月29日

アルパカが入学してから約2カ月後、この日は、アルパカにリード（首ひも）をつけ、小屋から牧場の方へ連れて行こうと考えた子どもがいた。広い牧場に連れて行けば、小屋の中よりもたくさんかかわることができると考えたからだ。1人の子どもの提案に賛同する子どもが多かったが、首にリードをつけようとする、アルパカは体を震わせて嫌がり逃げる。それに懲りることなく、壁の隅にいるアルパカの背後からそっと近づき、リードをつけようとするがまたアルパカは逃げる。やっとの思いでリードをつけることができた時には、まわりの子どもたちからは拍手が沸き起こった。みんなで喜んだのもつかの間、リードをつけることができて、アルパカはなかなか子どもたちの思うように動かない。牧場に行こうとしないため、無理やり連れて行こうと力を入れてリードを引っ張る子どもも出始めた。写真3はその時の様子である。

A児は、この日初めてアルパカにえさをあげることができた。作文シートには、「前は怖がって触れ合えなかったけ



【写真1】



【写真2】

ど、今日のはじめて配合（飼料）をあげることができてうれしかった。」と喜びを記述した。アルパカのことを思い、うんちの片付けやえさの補充でアルパカとかかわろうとしてきたことで、少しずつアルパカとの距離を縮めてきた。そして、この日はようやくえさをあげることができた。毎日アルパカとかかわってきたが、「触れる」という行為に至るまで、1カ月半近くかかった。しかし、ここには、A児としての『かかわりの広がり』を見ることができる。

一方、B児は級友がリードをつけることに成功した時に拍手はしなかった。アルパカの様子から嫌がっていることを推測し、自分たちのしたいことだけを考えて行動している級友のことを腹立たしく思っていることが、その険しい表情から伺えた。その日の作文シートには、「きは無理やりリードをつけられてすごく嫌だったと思う。引っ張った人はきは死んでもいいと思ったのかな。命を守っていけるか心配になりました。」と記述した。リードをつけることが目標になった「アルパカとかかわりたい」という子どもたちの思いと、「アルパカの気持ちがまず優先されるべき」とのB児の思いは、まるで反対のように見える。また、「死」や「命」という言葉は、子どもの作文シートに初めて出てきた言葉であった。

A児とB児のアルパカへの距離感は全く異なり、距離を縮めるのに費やす時間も大きな差がある。しかし、対象が中心となったかかわり方には、二人とも成長が見られる。この二人に象徴されるように、成長の仕方や度合には、優劣がつけられるわけではない。筆者は引き続き二人の成長を見守る形で指導にあたることにした。

(3) 保育園児を招待する

自分たちがアルパカとの距離を縮めていくと、今度は多くの人に「アルパカを知ってほしい」、「アルパカと仲良くなって欲しい」という思いが生まれてきた。そこで、校区にある2つの保育園の園児を招待しようということになった。

子どもたちには、アルパカとも保育園児とも一緒にやりたい活動を考えさせた。そして、やりたい活動が同じメンバーごとにグループを作った。お世話の仕方を教えるコーナー、えさやり体験ができるコーナー、アルパカの本を読み聞かせるコーナー、アルパカのパズルができるコーナー、迷路をしながらアルパカのクイズを出すコーナー、アルパカの絵を描きお面を作るコーナー、アルパカと記念写真を撮れるコーナーと、全部で7つのコーナーを考え、やりたい活動の実現に向けて、級友と協力しながら準備を進めた。筆者は、作文シートから、子どもたち一人一人の思いや選んだコーナーの意図を把握し、子どもたちのやりたいことは否定せずに、子どもたちを見守っていくことを心がけた。しかし、何をしても良いわけではなく、アルパカとつながっている活動であるかどうかを見極め、そうでなければ助言するようにした。

A児は迷路コーナーに所属した。自分自身が好きな迷路を作ることで、保育園児に楽しんでもらいながらアルパカについて詳しくなって欲しいという思いをもったからだ。しかし、なかなか迷路ができあがっていかない（写真4）。メンバーは、迷路を作りたいという意欲は高く持っていたが、どのようなコースにするか、段ボールをどのようにつなげていくか、ハードルやコーンはどこに置くかなどの具体的な計画は、一人一人の思いがばらばらでなかなか決まっていかなかった。そんな中、A児は、作文シートに「みんなで力を合わせてがんばりたい。」と記述した。協力することがコーナーを成功させるために大切であるということを感じ始めていた。

A児は、生活科の時間だけでは準備が間に合わないと考え、休み時間にも準備を行おうとメンバーに声をかける。なんとか迷路を作ることができて迎えた1回目の招待活動、たくさんの園児が迷路コーナーに来て大盛況であった。A児は、「みんなで心を1つにしたから段ボール迷路をたくさんつなげられてよかったです。次はもっとがんばってつなげたいです。もっとなかよく作りたいです。」と記述した。級友と協力することの大切さを学び、次はもっと迷路を長くつなげたいという意欲をもった。2回目の招待活動には、1回目よりも長い迷路を作ることが出来、園児を迎えた。振り返りには、「楽しそうに迷路をしていてとてもうれしかったです。みんなで心を1つにしたから成功したのだと思います。」と記述し、級友と協力して迷路コーナーを成功させた充実感



【写真3】



【写真4】

を味わうことが出来たことがわかる。

ここで特筆すべき点は、A児のシートにアルパカに対しての記述が一切ないことである。アルパカを中心に置きながらも、級友や保育園児とのかかわりを大切にしている様相が伺える。つまり、極論ではあるが、この活動に限って言えば、A児の思考はアルパカから離れ、人と人とのつながりが中心となっているのだ。

(図2)

一方、B児は、触ったり、えさをあげたりすることができるコーナーに所属した。「準備をがんばります。バナラのおっぱいは触らないように伝えます。」と作文シートに記述し、アルパカのどの部位なら触っても良いか、自分の経験を生かして伝えようと考えた。1回目の招待活動では、緊張のせいか、保育園児にあまり説明したり教えたりすることができなかったが、この日の作文シートには、「バナラのお腹を触るとバナラが蹴ることが多いです。お腹を触ると怒るんだと思いました。」と記述した。2回目の招待活動では、1回目の反省を生かし、触っていい部位を予め伝え、見本を見せてから触らせるように工夫していた。アルパカも嫌がる様子もなく、園児も「気持ちいい」と声をあげながらアルパカをなでることができていた。

B児は、園児とのかかわりながらも、アルパカへのかかわり方を考えている。アルパカと保育園児が触れ合っている様子を見て、今まで気がつかなかったアルパカの新たな特徴に気付くことができた。B児は一貫して、アルパカの様子から気持ちを捉え、アルパカとのかかわろうとしている。(図3)

A児とB児は、対象に違いはあるが、どちらも他者を理解し、行動しようとしていることに変わりはない。決してどちらがいいというものではなく、一人一人のかかわり方や、思いやりの育み方には違いがあることを理解し、それぞれの個性を大切に、見守っていくことが大切である。

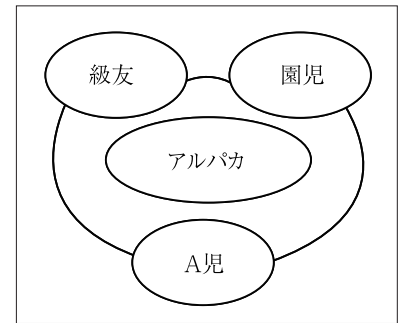
6 考察

(1) 育まれたと考える「思いやりの心」について

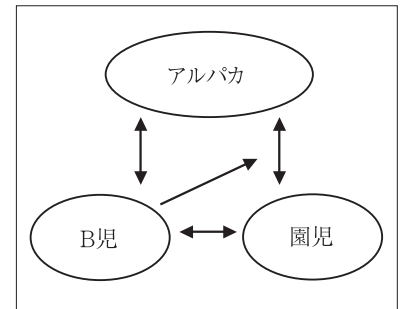
B児は、初めからアルパカとの距離は近かった。なかよしタイムでは、アルパカの近くに寄って行き、えさをあげたりなでたりしていた。そのかかわりを続けていると、次第にアルパカの『動作』を観察するようになる。耳の動きや、足の動きからアルパカの感情を推測するようになっていった。自分がやりたいかかわりを一方的にするのではなく、アルパカが何を求めているか、どう思っているかを推測して行動するようになっていった。「かかわりながら相手の気持ちを考えて行動する」姿には、B児としての「思いやりの心」が育まれた様相が感じられる。

一方、A児はアルパカとの距離を縮めるのに時間がかかった。アルパカへの恐怖心から、触ったり、なでたりという直接的なかかわりはなかなかできなかった。保育園児の招待活動は、アルパカとは離れて、級友とのかかわり方を学ぶ機会となった。しかし、うんちの片付けやえさの補充など、アルパカのためになることを考え、間接的にアルパカとかわっていきながら、少しずつ距離を縮めてきた。アルパカの卒業式で、アルパカを撫でながら、「また会いに行くね。」と声をかけたり、作文シートに「離れるのが寂しいです。いっぱいできた思い出は絶対に忘れません。」と記述したりする姿からは、A児の中心にはずっとアルパカがおり、少し離れた所から、アルパカのためにできることを考えていたことが伺える。A児には、「相手のことを考え、相手のためにできることをする」という「思いやりの心」が育まれたということがわかる。

2人の「思いやり」は、対象との距離という意味合いにおいて、似て非なるものである。2人の思いの違いは、簡潔に表現すれば、「アルパカとできること」と「アルパカにできること」と表せるだろう。こうした違いは、その子の個性とも呼べるべき要因が多分に影響していることは間違いないだろう。しかし、『アルパカ』の特性が非常に効果的に働いていたことは、A児とB児2人に代表される「強い思い」の表出によって明らかである。そこには、アルパカが穏やかな性格で、安心している時は子どもと非常に近い距離で触れ合う一方、怒りや不安といった感情を、「動かない」、「蹴る」、「逃げる」などの行動で明確に表し、子どもの『かかわり方』がわかりやすくフィードバックされるという教材としての価値が感じられる。



【図2】



【図3】

(2) 子どもに「思いやりの心」を育むために有効であったと考えられる教師の役割

① 見守り、認める

対象へのかかわりの仕方、またそのタイプは、一人一人の子どもたちによって違いがあり、思いやりの育み方も一様ではない。また、子どもたち一人一人のアルパカとの距離感は様々であり、距離を縮めるのに費やす時間も一人一人に違いがあった。教師は、一人一人の子どもたちの「違い」を、活動の様子や作文シートから読み取り、十分に把握したうえで、個性を尊重するとともに、子どもたちの変化を見守り、成長を認めていくことが大切である。その変化は、大きく表れることもあるが、小さな変化も多い。その小さな変化を見落とさないように、子どもたちをよく観察することが重要である。自分の思いや成長を認めてもらう経験は、相手を認め、相手の気持ちを考えて行動するという「思いやりの心」を育むことにつながっていったと言えるだろう。

② 子どもの気づきを共有する

低学年という発達段階では、自分のやりたいことに没頭する時間を確保することは重要である。それぞれがやりたいことを行う時間が十分にあると、次の活動への思いや意欲が生まれてくる。しかし、常に自分のやりたいことだけを行ってはい、自分の活動を振り返ったり、さらに良いものへと改善したりしていくことは難しいだろう。そこには、自分との比較対象が必要である。

筆者は、1時間の中に、アルパカへの気づきを共有する場を設けていった。授業の終わりに、その時間に気付いたことを発表する場を設定したり、「怒っているときは耳がピンとたつよ。」のように、アルパカへの「気づき」が記述されている作文シートを、全体で紹介したりしていった。一人の子どもの「気づき」を学級全体で共有していくことで、自分では気付かなかったことに気付いたり、自分の行動を振り返り、改善しようとしたりする姿が見られるようになっていった。これを繰り返していくと、次第にアルパカの『動作』に着目する子が増えていった。耳がピンと立つ様子や、足を後ろに蹴る様子を見て、「みんなが困むから怖がっているんだよ」「嫌がっているからやめようよ」と、動作からアルパカの気持ちを推測し、声をかけ合う姿が見られるようになっていった。「活動」→「振り返り」→「共有」というサイクルを繰り返すことが、「思いやりの心」を育むことにつながっていったと考えられる。

7 おわりに

今回の実践で、大型動物である「アルパカ」を学習材にしたことや、子どもたち一人一人のアルパカへのかかわり方を十分に観察していく中で、指導の改善へのヒントとなるものをいくつか得たように感じている。しかし、子どもたちを見守ることや認めること、気づきを共有することは、どのような場面で、どのように教師が振る舞うのか、言い換えれば、どういった基準を教師が持ち合わせなければいけないのかが、非常に迷うところであり、まだまだこの部分には研究を継続すべき部分が残されている。また、学校によっては、大型動物を飼育することが難しい環境にある学校もある。動物飼育以外の学習についても、子どもたちに「思いやりの心」を育むことができるよう、今後も有効な手立てを探っていきたい。

引用・参考文献

1. 吉越 良子, 「あたたかい学級集団を育む動物飼育を中核とした生活科の展開ーアルパカを学習教材とした大型動物飼育の工夫ー」, 『教育実践研究第22集』, 上越教育大学実践研究センター, 2012年, pp.333-338
2. 大西 秀彦, 「学校における望ましい動物飼育のあり方」, 日本初等理科教育研究会, 2000年